

水田雑草として知名度上昇中のアシカキ，村越・牧野図鑑に残る「謎」も

森田 弘彦

「雑草のよもやま第28回（植調56巻3号）」などで少し触れたアシカキ (*Leersia japonica* Makino ex Honda) が，畦畔やそこから水田に侵入するイネ科の多年生雑草として問題視されることが増えてきた。2021年に，九州地方では福岡県・佐賀県・宮崎県・鹿児島県で「横ばい，もしくは増減不明」（各県からの雑草発生状況の情報提供 九州の雑草 51, 2022），関東地方では群馬県・長野県で近年増加傾向（「雑草と作物の制御 16・17」, 2022）と認識されている。笠原安夫先生が「池，沼や野原の湿地，みぞべにはえる多年草・・・」（「日本雑草図説」, 1968）と記述した頃の状態とは異なってきた。

雑草としての問題点は，「・・・水田周縁部や湿地等の湿潤な場所で越冬する多年生雑草である。春期に越冬した根茎から発生し，草刈り機による除草を行っても再生し，次第に水田内に侵入し，多発すると水稻生育に影響するばかりでなく，収穫作業の支障となり問題となる。（長野県農業技術課専技ニュース 2020）」で，増加の要因は「生産者の大規模化等に伴い畦畔管理にかかる手間が減ったこと（東 聡志 「日植調北陸支部だより 20」, 2020）」とされ，これらは北海道を除くアシカキの分布域でほぼ共通するものと思われる（図-1）。

関東地方では3月には越冬芽の萌芽が始まり，チゴザサと同様に頂芽の節間が長く伸びてほふくする稈の節などから発根，分株して繁茂する。ほふく稈や株基部が土中に入って

根茎のようになるが，土中を横走する根茎は持たない。夏の間，水分のある条件下では稈の切片から苗条が発生する（図-2）。9～10月に特徴のある穂を出すが，冬までに穂を着けない場合もしばしばあるので，種の識別には長い膜質の小舌を確認するのがよい（図-3）。

東京大学植物学教室の2代目教授をつとめた松村任三先生（1856-1928）は，当時知られていた日本の植物のリストを

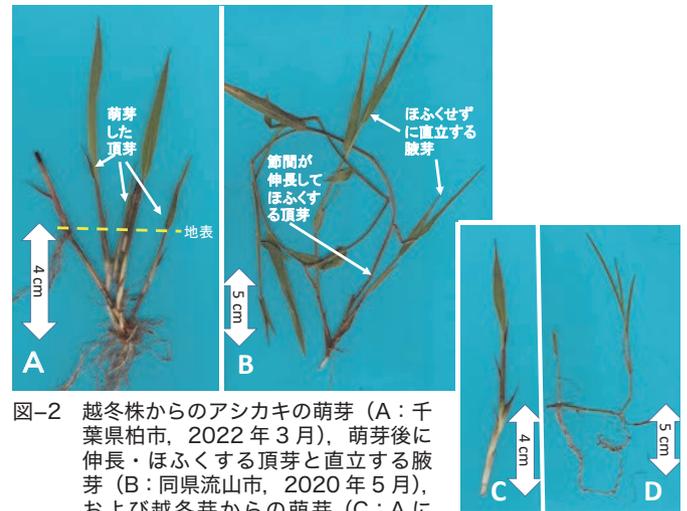


図-2 越冬株からのアシカキの萌芽 (A：千葉県柏市，2022年3月)，萌芽後に伸長・ほふくする頂芽と直立する腋芽 (B：同県流山市，2020年5月)，および越冬芽からの萌芽 (C：Aに同じ)，2節を有する稈の節から再生した苗条 (D：千葉県柏市で培養，2022年8月)

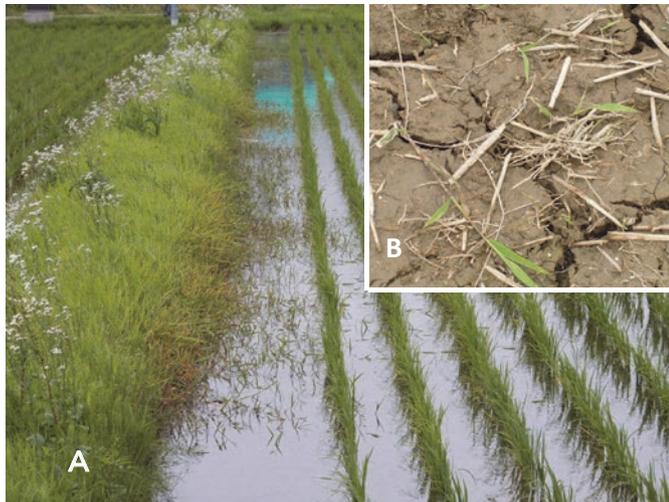


図-1 水田に発生するイネ科多年生雑草アシカキ (A：移植水田に畦畔から侵入，福島県，2016年6月，B：湛水直播水田の落水出芽期間に萌芽，秋田県，2008年5月)



図-3 アシカキの穂 (A：千葉県我孫子市，2019年10月，B：茨城県取手市，2017年10月)，小穂 (C：Bに同じ) と小舌 (D：千葉県松戸市，2022年8月)

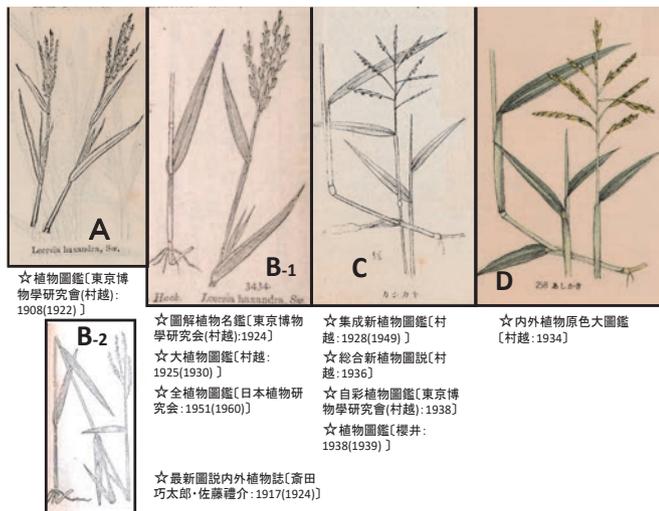


図-4 村越三千男氏(東京博物学研究会)およびその関係者による「植物図鑑類」でのアシカキの図の変遷
注:「1908(1922)」は「1908年初版,1922年版に掲載の図」を示す,以下同

残された。帝國大學編纂の「帝國大學理科大学植物標品目録,1886」では和名を示さずに「*Leersia* sp. ?」としたが、「帝國植物名鑑 下巻 顕花編,1905」や「改訂植物名彙 後編 和名之部,1916」では *L. hexandra* Sw. の学名でアシカキを記録した。

台湾産の試料とともに *L. hexandra* の学名で認識されていたアシカキについて、牧野富太郎博士が高知と武蔵産の標本に基づいて *L. hexandra* とは異なる新種として1892年に形態などの記載なしで *L. japonica* Makino の学名を付した(植物学雑誌 6, 1892)。新種の特徴は、1925年に本田正次先生(1897-1984)が日本のサヤヌカグサ属植物を *Leersia* から *Homalocenchrus* 属に移す見解を発表した際に、アシカキを「*H. japonicus* (MAKINO) HONDA nom. nov.」と整理したうえで記述された(Bot. Mag. Tokyo39, 1925)。しかし、現在まで本田先生の見解ではなく、*Leersia* の属名が使われている。

筆者の知る限りで最も古いアシカキの図は、松森胤保氏(1825-1892)の「両羽博物圖譜・植物圖譜 竹稻部(酒田市立光丘文庫所蔵)」に「1891(明治24)年10月1日」の日付のある彩色図である(雑草のよもやま12, 植調52(2))。明治年間末期からの庶民向けの植物図鑑などの普及に伴い、アシカキも図付きで登場する。明治末期から昭和中期にかけて植物図鑑の大衆化に尽力した東京博物学研究会代表の村越三千男氏は、牧野博士の校訂で発行した「植物図鑑,1908」から「自彩植物図鑑,1938」まで4種のアシカキの図を用いた(図-4)。しかし、1924年の図(B-1)は、「斎田巧太郎・佐藤禮介「最新圖説内外植物誌」,1917」の図(B-2)と共通の構図に見え、また、1928年の「集成新植物図鑑」以降の図(C, D)は、牧野博士が「日本植物図鑑,1925」からそれ以降の「牧野日本植物図鑑,1940～」で使用したアシカキの図とは、①左右が逆転、②穂の枝梗数が11から8に減少、③小穂と雌雄ずいの図が欠如(③は

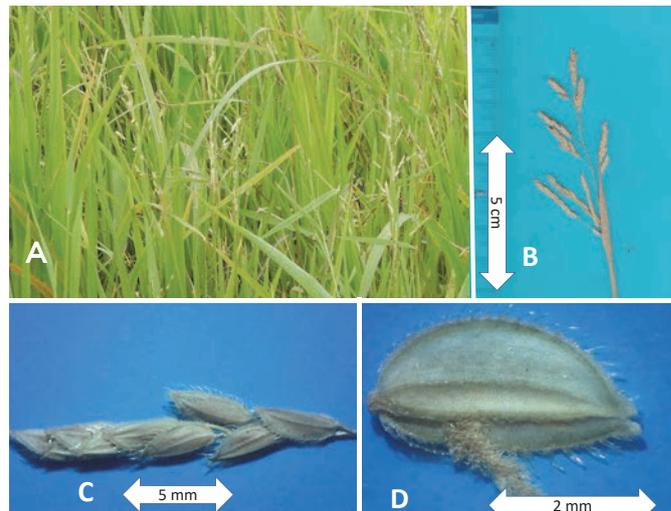


図-5 熱帯・亜熱帯に広く分布する台湾アシカキ *L. hexandra* Sw. A:イネほ場での出穂, ガーナ北部, 2014年9月, B:穂, C:穂の一部(枝梗), 中国 Xishuangbanna, 1992年9月採集の標本, D:雌しべを抽出した小穂, ガーナ北部, 2009年9月採集の標本

「牧野日本植物図鑑」以降)するものの、共通の構図に見える。なお、村越氏の「植物図鑑」を校訂し、「日本植物図鑑」を執筆した牧野博士は、これらの書でのアシカキに、10年以上前に自身で発表した *L. japonica* を使わず *L. hexandra* のまま残した(筆者の確認は「植物図鑑」:1922, 19版, 「日本植物図鑑」:1925, 3版)。また、「牧野日本植物図鑑」では「あしかき *Leersia japonica* Makino. (= *L. hexandra* Hack.)」と併記し(筆者の確認は1958, 33版<増補版・訂正版>まで)、1961年の「牧野 新日本植物図鑑」の発行に至って *L. hexandra* が消える。

植物図鑑の制作と普及にかけた村越氏と牧野博士の確執の過程は、「俵浩三 牧野植物図鑑の謎, 1999」や「田中純子 向坂道治と牧野富太郎の交流, やまとぐさ4, 2020」などに詳述されているが、上記のようにアシカキをめぐる「謎」も残されている。

アシカキの名については、牧野博士が「和名ハ足搔ノ意ニシテ人此草アル水ニ入レバ足ヲ擦過スル故スク云フ(「牧野日本植物図鑑」, 1940)」と説いた。この他にも、イシミカワやウナギツカミにも使われることがある(八坂書房編「日本植物方言集成」, 2001)。

牧野博士が新種 *L. japonica* を抽出した残りの *L. hexandra* に「台湾アシカキ」の和名をつけたのは上記の本田先生で、この種は日本では鹿児島県の島部や沖縄県に分布する。熱帯・亜熱帯の稲作ではごく普通に見られる雑草で、筆者も海外出張の際に中国南部や西アフリカのガーナ北部などで採集したことがある(図-5)。

アシカキは、日本の水田とその周辺で雑草として認知されるようになってきたが、チゴザサ、キシユウ(チクゴ)スズメノヒエとしばしば混生するので、十分に識別した上でその動向を注視して頂きたい。